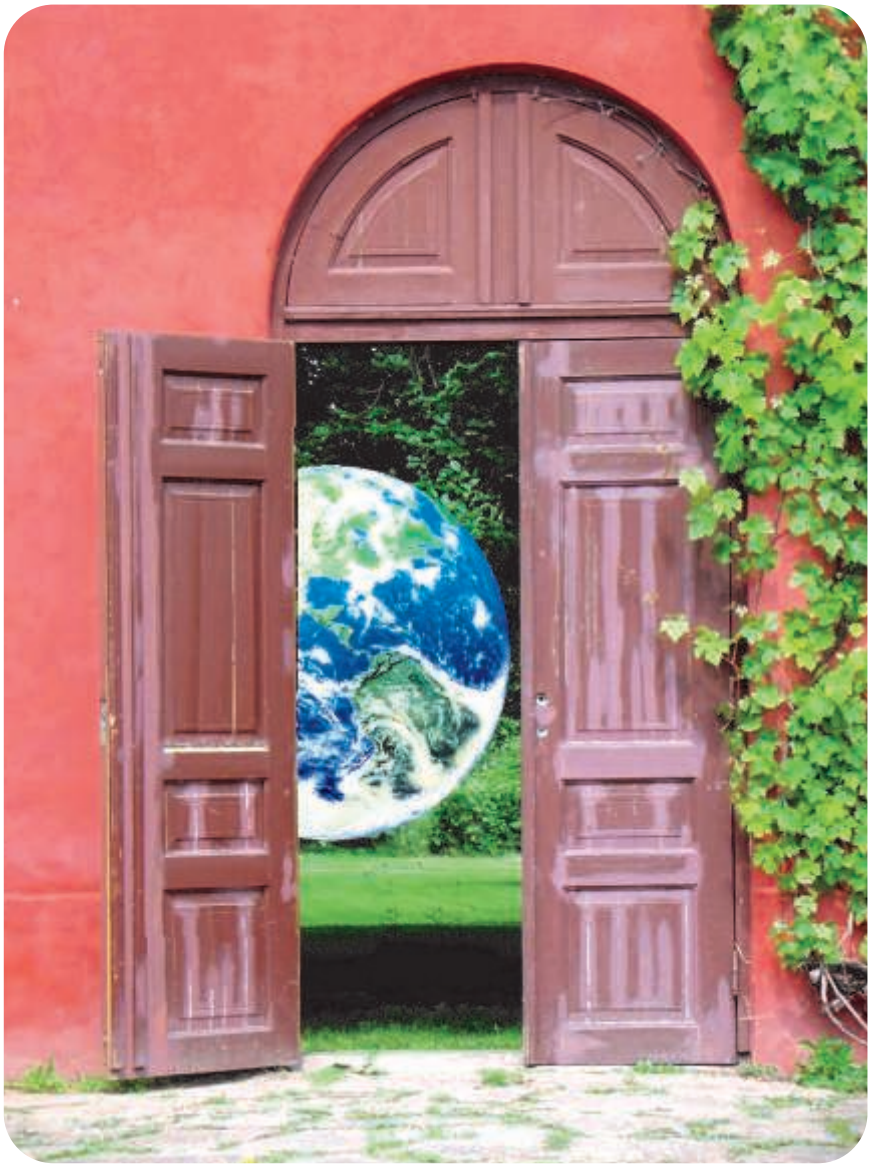
ISSN 2186-9650

独立行政法人 国立国際医療研究センター
国際医療協力局

NEWSLETTER

明日の国際保健医療協力magazine spring 2012



特集 開こう！グローバル保健医療人材への扉

はじめに

急速にグローバル化が進む中で
日本の若者たちについて、海外に出ようとしない
「内向き志向」にあると危惧する声が聞かれます。
しかし、若い世代の多くは世界に関心を持ちながらも
海外で働くための一歩を踏み出せないだけなのかも知れません。

NEWSLETTER spring 2012 は、
次世代を担う人たちに世界に目を向けて
動き出すきっかけを見つけてもらえるように
『開こう！グローバル保健医療人材への扉』を特集します。
世界に視野を広げてみたら人材としての可能性もきっと広がることでしょう。

NEWSLETTER spring 2012

Contents

はじめに	2
NCGM 国際医療協力局 NEW TOPICS	3
特集：開こう！グローバル保健医療人材への扉	4
グローバル保健医療人材の役割	6
グローバル保健医療人材になりたくなったら 国際保健医療協力の入口と学び場	8
インタビュー グローバル保健医療人材を目指す人たち 国際保健医療協力サークル『BRIDGE』	12
国際保健医療協力の専門家になったら NCGM国際医療協力局の専門家の スキルとキャリアパス	18
インタビュー グローバル保健医療人材になった私 NCGM国際医療協力局　医師　木多村知美	22
これからのグローバル保健医療人材へ	28
国際保健や国際協力が学べる教育研修機関リスト	30
海外からの便り	31
セミナー情報　編集後記	32

NCGM 国際医療協力局

New Topics

NCGMは続けます　東日本大震災　被災地の復旧・復興支援

国立国際医療研究センター（NCGM）は、東日本大震災で被害を受けた宮城県東松島市と協定を結び、保健衛生分野の復旧・復興に支援を続けています。

NCGMは、震災当日から約3か月半にわたり合計48隊、延べ239名の職員を被災地へ派遣し、避難所の巡回診療、保健師の災害業務、浸水世帯の全戸健康調査などを支援しました。しかし、人々が安心して暮らせる生活を取り戻すまでには、さまざまな継続的な支援が不可欠です。同市との協定に基づき、2011年7月より同市の保健福祉部が行う事業をNCGM国際医療協力局の医師と看護師が海外での地域保健医療支援の経験を活かしながら支援しています。

上：仮設住宅
右：戸別訪問健康調査

協定に基づく復旧・復興支援事業

- 仮設住宅入居者支援事業
- 在宅者支援事業（健康支援調査）
- こころのケア事業
- 災害マニュアル改訂/活動報告検証事業
- 人材育成事業

国際協力の戦略的推進事業で産官学連携

NCGMは、長崎大学と株式会社医学生物学研究所と連携して、2012年度から「途上国におけるイノベーションを促進する国際協力の戦略的推進」事業を実施します。このプロジェクトでは、今後5年間にわたり、複数感染症の一括同時診断技術を実用化できるアフリカ開発拠点の整備や、その診断技術を利用したサハラ以南のアフリカの感染状況を把握できる仕組みの構築を目指しています。アフリカの貧困層にまん延する感染症の実態把握や新しい感染症対策の戦略策定のほか、開発された技術が国際標準として活用されることで、日本の産業界がアフリカに進出する基盤を構築できるといった波及効果も見込まれています。

国際医療協力局の25周年記念誌

25周年を迎えた国際医療協力局の実践と成果の集大成が記念誌として発行されました。日本の国際保健医療協力を牽引し培ったノウハウが詰まった一冊です。

特集 開こう！ グローバル保健医療人材への扉

グローバル保健医療人材の育成

昨今の世界の状況は、目まぐるしく変化し、国境を越えて影響し合うグローバリゼーションがますます進んでいます。世界の問題が日本にも影響し、また日本の活動が世界の活動にも影響を及ぼしています。保健医療分野においても、国内・国外という枠を取り払い、世界全体の保健医療の課題に取り組む「グローバル・ヘルス」という発想が広がりつつあります。このような中で、国際的な視野を持つ若い世代の人材を育成する必要性が非常に高まっています。

国立国際医療研究センター（NCGM）国際医療協力局は、創立からの25年間の実践の中で、国際保健医療協力の活動内容やその必要性を多くの人に伝えてきました。中でも、グローバル保健医療人材の育成は重要な活動の1つです。保健医療問題は国境を越え、且つ多様化しており、国際保健医療協力を通じて、その解決に当たる質の高いグローバル保健医療人材の育成は緊急の課題であると言えます。

多様化する世界規模の保健医療問題

国や地域によって健康水準には差があります。貧困や紛争、水の状態などの環境の違いが要因となり、感染症や母子保健、成人病、交通事故などを含む疾病構造の差を引き起こし、こうした「健康格差」が生まれます。保健医療従事者の不足や、その質の問題も背景にあります。「健康格差」は、決して開発途上国にしかない問題ではなく、多くの国が自国内でも似たような問題を抱えています。

また、人々が国境を越えて往来する機会が増えたことで、SARSや新型インフルエンザなどで見られたように、感染症の広がりなどの脅威も増しています。感染症を未然に防ぐためのノウハウや、発生した時の適切な対処法などは、世界規模で取り組んでいく必要があります。

グローバル保健医療人材は、このような世界各地で起こりうる保健医療問題に各国と協働しながら取り組んでいます。

グローバル保健医療人材に求められるスキル

保健医療人材がグローバルに活動するために、どのような知識やスキルが必要となるのでしょうか。かつてNCGM国際医療協力局の活動が始まった頃、日本の国際協力の主な内容は無償資金協力による病院建設と診断・治療などを含めた医療技術支援でした。病院などの医療施設に派遣された医師や看護師が臨床への支援を行っていました。より効果的な援助を模索する中で、地域の保健医療を担う行政への支援に関わるようになり、地域や国の保健医療の仕組みづくりの支援へとシフトしていきました。そして現在では、国際社会の中で多くの国際的なプログラムに参画し、さまざまな援助機関や組織と協力したり、現場に根差した知見を国際社会に還元したりと、活動の幅が広がってきています。国際保健医療協力の活動内容が変化するとともに、求められる人材像も変化しています。

保健医療従事者としての知識と技術、臨床経験などに裏付けされた専門性や語学力だけでなく、広い視野と多様な分野の知識、異文化の中で行動できるコミュニケーション能力やマネジメント力なども不可欠です。開発途上国で保健医療の課題を発見する時、医療技術の知識だけでは解決が難しい場面が多々あります。法整備の問題が背景にあると気づけば、法律の知識が役立ち、その知識がない場合はその分野の専門家との協働が求められます。さらに、その課題のもっと根本的なところには、その国の生活や文化、宗教などが背景にあるかも知れません。そのことに気づく柔軟な視点を常に持ち、異文化を丸ごと理解した上で、解決策を現場の人々とともに考えて取り組むことのできる能力が必要になります。

NCGM国際医療協力局は、研修や講座の開催を通じて、グローバル保健医療人材としてのキャリアを進むための最初のきっかけを提供しています。世界に目を向けると日本の現状がより明瞭に見えてくることがあります。1人でも多くの次世代を担う若い人たちに、世界への扉を自ら開けてみる機会を持っていただければと願っています。

グローバル

グローバル保健医療人材には、保健や医療の専門家である医師・看護師・助産師・薬剤師・検査技師が多くいます。そう聞くと、保健医療分野の国際協力とは、医師などの資格を持つ専門家が開発途上国へ行って病気の人たちを治療することがその役割だと考えられがちです。しかし、実際は意外と別の仕事をしています。

どんな仕事なんだろう？

国際協力と一言で言っても、開発途上国への援助には、経済、教育、食料、医療など、さまざまな分野があります。その中で保健医療分野では、開発途上国の医療や保健衛生の環境をより良くするために、色々なプロジェクトを通じた技術支援や人材育成、国連が定めるMDGs（ミレニアム開発目標）を始めとする国際的な取り組みへの参画、研究や調査などを行っています。もちろん自然災害や感染症の大流行などが発生した地域への緊急医療支援も援助の1つです。しかし、国際協力を行う保健医療人材の仕事の多くが、医療援助ではなく、開発途上国の人たちと話し合いながら、その国の保健医療システムをともに考え作り上げていくという、マネジメント要素の強い業務内容だということはあまり知られていません。NCGM国際医療協力局を例にその仕事の中身をのぞいてみましょう。

国際医療協力局の役割

1. 調査・研究 ……国際協力の効果的な推進に必要な調査や研究を行います。
2. 開発途上国への技術支援 ……公衆衛生や母子へのケアなどのノウハウを支援します。
3. 開発途上国の保健医療人材の育成 ……途上国の保健医療スタッフの教育研修を行います。
4. グローバル保健医療人材の養成 ……国際協力を行う日本人向けの教育研修を行います。
5. 国際保健のネットワークづくり ……省庁や大学、研究所など関係機関と連携して取り組みます。
6. 国際的な政策支援 ……国際会議などで現場の知見を報告します。
7. 緊急医療援助 ……健康危機のある地域へ医療援助を行います。

保健医療人材の役割

海外と国内で
専門家の仕事はどう違うんだろう？

国際医療協力局に所属する専門家は、医師・看護師・助産師・保健師など、保健医療の専門知識と技術を持った人たちです。その約半数は海外に派遣されます。期間は週単位の短期から年単位の長期までさまざまです。

海外に派遣された専門家は、母子保健や感染症など、それぞれが持つ専門分野のプロジェクトの任務にあたります。派遣国のカウンターパート（受け入れ担当者）と協働でその国の行政に関わっていきます。

海外での仕事

NCGM専門家のある日のスケジュール
in ベトナム

7:00	出勤前に病院を訪問
8:00	省保健局にあるオフィスに出勤
8:30	プロジェクトのスタッフと打ち合わせ
10:00	本部（日本）との業務連絡や事務作業など
12:00	ランチ
14:00	カウンターパートと定例ミーティング
15:00	JICA担当者とスカイプでミーティング
16:00	本部（日本）との業務連絡や事務作業など
17:00	退社
18:00	現地スタッフと飲み会で交流タイム

日本での仕事

NCGM専門家のある日のスケジュール
in 東京

8:15	本部オフィスに出勤
8:30	抄読会（論文の合同レビュー会）に出席
9:30	派遣会議
10:00	母子保健システムグループの定例会議
12:00	ランチ
13:00	課内会議
15:00	検討中の案件の打ち合わせ
	事務作業など
17:15	退社
18:00	フランス語の社内研修

日本にいる専門家は、主に海外支援や研究、教育研修の企画・実施などの業務にあたっています。海外支援では、派遣専門家がプロジェクトや研究を進める上で必要とする情報やアドバイス、検討などを東京の本部オフィスでサポートしています。例えば突発的に派遣先で院内感染が発生したりする場合も、現地にいる派遣専門家が東京オフィスの専門家と協力して解決にあたります。また、WHO総会をはじめとする国際会議にも日本の代表者の1人として参加します。教育研修では、開発途上国の保健医療人材を受け入れて行う研修や、国際協力を目指す国内の人材のための研修などの企画から実施までを担当しています。また、専門家はそれぞれの専門分野の研究も進めています。

グローバル保健医療人材になりたくなったら

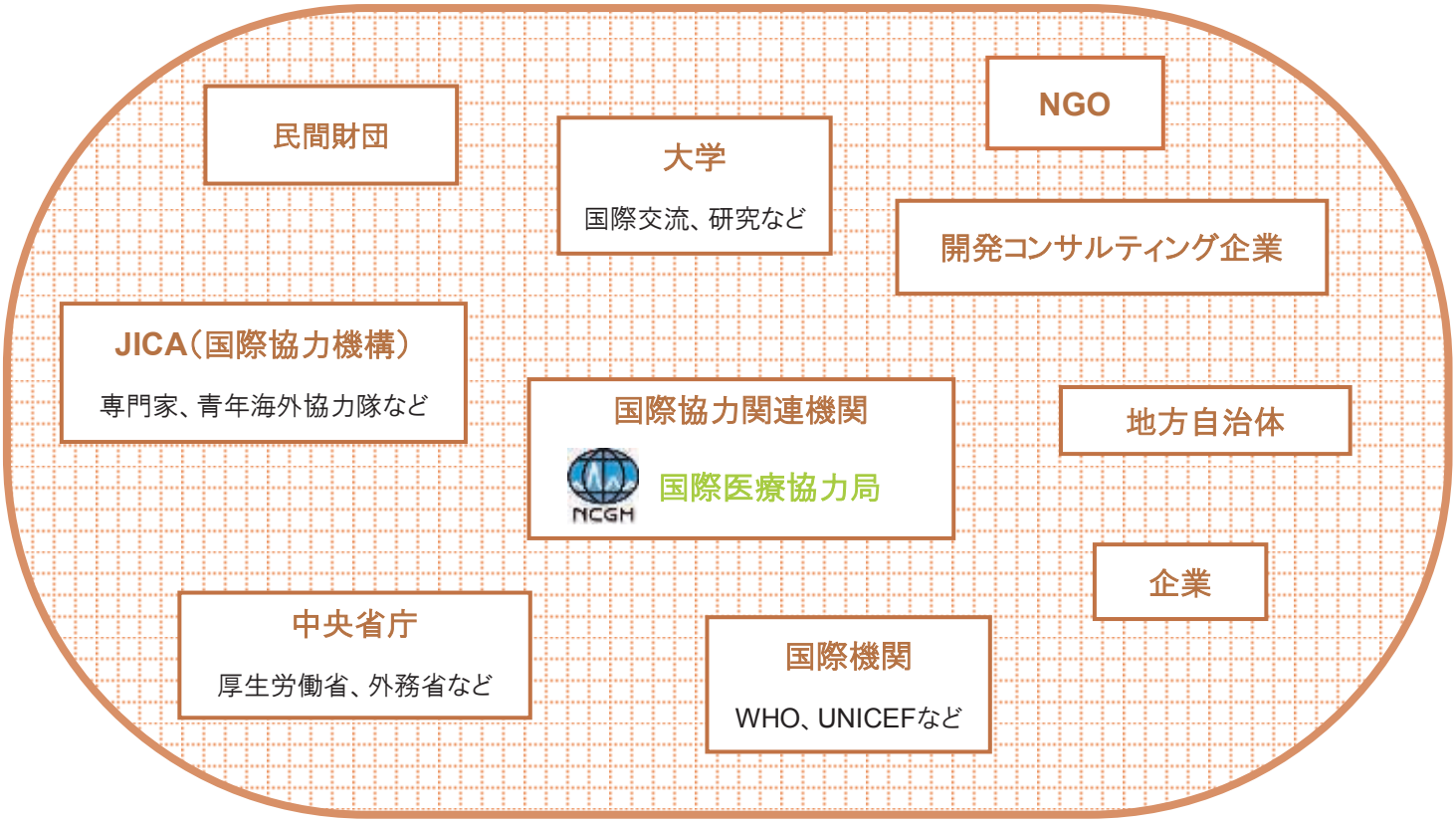
国際協力には、その専門機関やNGOだけでなく、公的資金や民間資金を活用してさまざまな業態が取り組んでいます。

公的資金による活動では、中央省庁が独自に国際協力事業を展開するほか、国際協力関連機関を通じてNGOや大学、開発コンサルタント企業などにプロジェクトを委託するなどして、ODA（政府開発援助）が行われています。民間資金による活動では、新興国などの新規市場を開拓したり、現地のNGOと連携して海外展開をしたりする民間企業などが、現地の経済発展や技術支援に寄与しています。

昨今では、こうした民間企業とODAの連携も重視されています。OOF（その他政府資金）と呼ばれるODA以外の公的資金を活用して、開発途上国における民間企業の事業展開を後押しする動きも活発化しています。

国際保健医療協力の道に進もうと考える場合にも、活動の場は医療援助だけでなく、多数の選択肢があります。どのような組織に入り、どのような職種で何を行うのか、自分自身の希望に沿って考えることができます。その過程として、関連した研修・講座に参加して、国際保健医療協力の世界を学んでみる機会などもあります。

国際保健医療協力の世界の入口



国際保健医療協力を学ぶ

NCGM国際医療協力局では、国際保健医療協力に関心のある方を対象に、基礎を学ぶ研修コースや活動を体験できるフィールド･ワークの機会を提供しています。

国際保健基礎講座

主催：NCGM国際医療協力局

NCGM国際医療協力局では、「国際保健医療協力を目指す人たちが継続的に学びを深めていく機会」として、一般の方を対象に毎年5月～3月の期間に全10回（各3時間）の講座を無料で開催しています。講座は、講義・ワークショップ・ディスカッションを取り入れた参加型で進められます。毎年、多くの参加者から「分かりやすくて国際保健についての理解が深まった」「グループ・ワークなので楽しかった」などの感想が寄せられています。

2012年度　開催スケジュールと内容

	日程	テーマ
第1回	5/12	国際保健とは？
第2回	6/23	緊急援助とは？ 国際災害援助で必要なスキルとは？
第3回	7/28	現場では何が起こっている？ 疫学
第4回	8/25	世界のHIV感染者の6割が住むアフリカで子どもたちは？
第5回	9/29	知りたい情報をどのように手に入れるか 情報検索スキル
第6回	10/27	途上国における母子保健
第7回	11/24	国際保健の現場で働く日本人
第8回	1/26	途上国における国際保健の新たな課題
第9回	2/23	プロジェクトとは　Part1 PCM手法
第10回	3/23	プロジェクトとは　Part2 SWOT手法 国際保健のキャリアディベロップメント

2012年度　国際保健基礎講座

参加申込　受付中

開催期間：5月-3月　全10回

月1回（第4土曜日）

（どの回からでも、１回のみでも参加可能）

参加費：無料

詳細・お申込みは…

NCGM国際医療協力局ホームページまで

http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/

国際保健医療協力を学ぶ

国際保健医療協力研修

主催：NCGM国際医療協力局

2010年度より新設された研修コースです。それまで実施されてきた「国際医療協力人材養成研修」と「国際感染症等専門家養成研修」を統合し、内容をより充実させたものになっています。4週間の研修コースで、講義・ワークショップなどの形式で行われるコア研修と、実際に海外の医療施設などを視察するフィールド実習で構成されています。基礎知識と実践力の習得を通じて、国際保健医療協力を行う日本人の人材を養成します。毎年、国際保健の分野での活動を志している保健医療従事者の方々が数多く受講しています。

2012年度　国際保健医療協力研修

6月より募集開始

期間：　9月24日～10月19日

場所：【コア研修】NCGM研修センター

【フィールド研修】

ベトナム社会主義共和国（予定）

参加費：個人負担はフィールド研修の実費のみ

（約20万円）

詳細・お申込みは…

NCGM国際医療協力局ホームページまで

http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/

2012年度　開催スケジュールと内容

日程	内容
9/24	【コア研修】 国際保健医療協力概論 国際機関、ODAと援助協調、JICA 人間の安全保障
9/25	【コア研修】 プライマリーヘルスケアと ヘルスプロモーション 社会的企業・BOP 緊急医療援助と国内災害支援の共通性 日本の保健行政のしくみ
9/26	【コア研修】 保健システムと母子保健 5Sカイゼン、人材育成
9/27	【コア研修】 感染症疫学 国際的プログラムへの貢献
9/28	【コア研修】 開発援助 社会的調査
9/29	【希望者のみ】 国際保健基礎講座（情報検索スキル）
10/1-3	【コア研修】問題解決手法
10/4	コア研修の評価 フィールド研修準備
10/5	フィールド研修準備
10/7-17	フィールド研修（ベトナム）
10/18	まとめ・プレゼンテーション準備
10/19	報告会

日程と内容は変更になる場合があります

2011年度　フィールド研修　in ベトナム

～国際協力の現場を体感し専門家の仕事を知る実践型研修～

9/4（日）

出発 !!

ベトナム・ハノイに到着

9/5（月）

AM プロジェクトの説明
　UNICEFのレクチャー
PM バックマイ病院を視察

実際のプロジェクトの目標、戦略、活動状況などが聞けました！

バックマイ病院の視察

病院とNCGMの関わりも分かりました！

9/6（火）

AM JICA事務所を訪問
　ホアビン省に移動
PM ホアビン省保健局の局長と面談
　ホアビン省総合病院を視察

ベトナム保健医療の現状と課題を学びました！

ホアビン省保健局長にご挨拶

看護師に説明しながら治療を行う医師

9/7（水）

AM 郡病院を視察
PM コミューンに移動
　ヘルスセンターを訪問

キンボイ郡病院を視察

地域の保健医療の機能と課題を学びました！

ホアビン省総合病院のスタッフとのグループ・ワーク

9/8（木）
9/9（金）

終日
　ホアビン省総合病院にて
　グループ・ワーク

現地の保健医療従事者と現状の改善についてディスカッションしました！

9/10（土）

AM 少数民族の村に移動
PM フリータイム

街並みからも異文化を肌で感じました！

9/11（日）

休日
ホアビンにてフリータイム

9/12（月）

AM ホアビン省総合病院にて
　グループ・ワーク
PM 報告会でグループごとに発表

9/13（火）

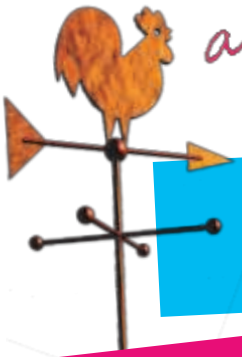
AM ハノイに移動
PM フリータイム

本場のフォー

9/14（水）

深夜　空港へ
早朝　成田空港に到着

現地の医療従事者と直接情報交換ができて有意義でした！



an interview with the coming generation

グローバル保健医療人材を目指す人たち

国際保健医療協力サークル『BRIDGE』

NCGMで誕生した国際保健医療協力サークル『BRIDGE』には、多忙な日々にありながら積極的に世界に目を向けて活動する次世代のグローバル保健医療人材がいます。彼らはなぜ世界を見ようとするのでしょうか。3名のメンバーがそれぞれの“今”と“これから”を語ってくれました。

『BRIDGE』 対談メンバー

（写真左から）

▶ **森山　潤さん　看護師6年目 『BRIDGE』代表**

4年間のICU（集中治療室）勤務を経て、国立看護大学校看護学研究科に在学中。専攻は政策医療看護学。人を育てる国際保健医療協力の道を目指しています。

▶ **青木 浩司さん　看護師3年目　結核病棟勤務**

『BRIDGE』副代表。昨年度、スタディーツアー（バングラデシュ）を企画。将来は、感染症や疫学の予防教育に携っていきたいと考えています。

▶ **藤岡 亜未さん　看護師3年目　重症病棟勤務**

国際協力には英語力を高めねばと職場の仲間と医療英語を勉強する「朝活」をしてます。

広報情報発信班（◆）：皆さんが参加している『BRIDGE』（ブリッジ）は、どのようなグループなんでしょうか。

森山：『BRIDGE』は、国際保健医療協力に興味のある人のための活動の場としてNCGMの中で2005年に始まったサークルです。医師、看護師、薬剤師など色々な職種の人が参加でき、どうすれば国際保健に関わることができるのか、忙しい臨床の日々の中で何ができるのか、ということを一緒に考えています。現在、登録者としては200名ほどいますが、多忙な方がとても多いので、実際に高い頻度で活動されている方は10名程度になります。

◆：主にどのような活動をされているんでしょうか。

森山：月に2回ほど定例会を開いて、勉強会や、セミナーの企画・準備などを行っています。また、毎年、実際に開発途上国の医療現場を体験するスタディーツアーを実施していて、その企画・準備なども行っています。

夏休みは弾丸スタディーツアーへ
現場を肌で感じると感情が突き動かされるんです

ー藤岡さん

◆：スタディーツアーというのは？

青木：海外の医療現場を実際に見学して、国際協力活動を学べるツアーです。去年はバングラデシュに行って病院や看護学校を視察し、現地の病院で働く人たちからレクチャーを受けました。夏休みを利用して自主的に参加するものなので、3泊5日の日程でした。弾丸ツアーです。（笑）

◆：藤岡さんも参加されたんですよね。実際に行ってみてどうでしたか。

藤岡：私はまだ看護師として仕事を始めて2年目ということもあり、普段は病院の中で必死に仕事を覚える毎日で、なかなか世界に目を向ける時間が持てないのですが、スタディ・ツアーのように世界の医療現場を肌で感じる機会があると、感情が突き動かされたり、逆に日本のことが見えてきたりと、本当に色々と学ぶことが多いと感じました。

バングラデシュで視察した病院

バングラデシュの看護学生たち

海外が好きだから
日本の外でも活動してみたい

ー青木さん

◆：皆さんはどうして国際協力に興味を持ったんですか。

森山：自分は高校生の時に青年海外協力隊に参加したいなと思ったのが始まりだったと思います。看護師を目指して、自分に何ができるのかを考えながら国際協力について調べているうちに、NCGMに国際医療協力局があることを知り、センター病院を希望して入りました。

青木：僕はもともと海外が好きで、日本の外でも活動してみたいという思いがありました。親戚に医療従事者がいたので看護師という職業に興味を持つようになって調べてみると、看護師として、特に国際感染症という自分が関心のある分野で、海外で活動する道があることが分かったのがきっかけでした。

藤岡：私も海外は好きだったんですが、看護師として海外を目指すことはあまり意識せずに、大学時代には国際協力の講義を受けたり、外部のセミナーに出てみたりしていました。森山さんが大学の先輩だったので在学中から『BRIDGE』の話を聞いていて、看護師になったら自分も絶対に参加しようって思ってました。

◆：『BRIDGE』の活動を通じて国際協力の世界に触れ、将来的には実際に仕事として携わりたいという希望をお持ちですか。

藤岡：私はまだ明確には決まってないです。まずは与えられた職場で自分のできることと経験を積んでいきたいという気持ちでいます。国内の臨床の場で看護師としてやれることをする一方で、『BRIDGE』を通じて世界に関心を持ち続けることはできると思っています。

青木：僕は感染症に関わる公衆衛生に興味がありますので、看護師としての経験をしっかり蓄積しながら、今後は海外の大学院への進学も検討したいと思っています。英語力や専門知識を高めて、将来的には感染症や疫学の予防教育に関わっていけるといいなと思っています。

BRIDGE主催のセミナー風景

臨床経験をしっかり積みたい
それがベースとなって国際協力にも活きるから

—森山さん

森山：自分は『BRIDGE』の代表でもあるので、国際保健医療協力を目指している人たちのモチベーションをいかに保つかということにも力を入れていきたいです。国際保健医療協力に関心が高い人は多いけれど、実際に専門家として活動できる場は狭き門ですので、モチベーションの維持は重要だと思っています。

また看護師としても、臨床経験をしっかり積みたいと考えています。ここ数年で強く実感するようになったのですが、臨床の現場で自分が行っていることというのは、海外での活動にも必要となる経験なんだということです。知識だけではなく、普段の患者さんへの接し方や、そのご家族との関わり方、他職種との調整など、ベースとなる臨床経験がしっかりなければ、海外に出た時に十分な活動をするのは難しいだろうと思うようになりました。

『BRIDGE』の活動を通じて国際保健医療協力への認識のギャップを少しでも減らしたい　ー森山さん

◆：国際保健医療協力にともに関心がある皆さんですが、看護師歴に応じてビジョンが違うのが面白いですね。森山さんが日本での臨床経験が国際協力をする上でも大切なんだと実感されたのはどういうご経験からだったんですか。

森山：看護師になって1、2年目のスタディ・ツアーで、現地のスタッフの方とのコミュニケーションの重要性を学び、それは国内の臨床の場でも共通して重要なことだなと体感しました。それと同時に、国内でも海外でも、医療の知識や人材育成、保健システムなどについては、看護師としての臨床経験がないと課題を把握して取り組むのは難しいとも感じました。たとえ海外でテキスト通りの説明ができたとしても、やはり看護師として自分自身が“なぜ頑張って取り組むことができたか”というような実体験がなければ相手国の人に伝わらないのではと思いました。

スタディーツアーにて

◆：国際医療協力局の専門家たちも、臨床経験の大切さを言われる方が多いですね。どの国の医療に関わっても、看護師としてのご経験が活きてくるということですよね。

森山：そうだと思います。就職して初めのころは、看護師の資格を取って海外に出よう、出ればすぐに役に立てるだろう、と考える方が多い気がします。きっと看護師としての経験値が活動にどれほど活かされるものかという認識を持ちにくいからだと思います。だからこそ『BRIDGE』は、そういう認識のギャップを少しでも減らして、実際の活動への理解を深める機会を提供できればいいなと思っています。

国によって医療の現状が違っても患者さんへの接し方は世界共通でした　ー藤岡さん

◆：藤岡さんは『BRIDGE』での活動がお仕事に活かせていると感じることはありますか。

藤岡：私も、去年の夏のスタディ・ツアーでバングラデシュの病院を視察した時に、現状が国によって違っても、患者さんへの接し方などは世界共通だなと感じました。だからこそ日本での日々の仕事の基本が大事なんだと思いましたし、今の自分に必要なことだと感じました。

◆：海外の現場を見ることが、現在の職場でも活かせる学びにつながるというのは、素晴らしいですね。そういう刺激のある『BRIDGE』の存在を知らないまま、実は国際協力に興味があるという人もいるかも知れないですね。どのようにして情報収集しましたか。

青木：　NCGMに入職した時のオリエンテーションで、森山さんが『BRIDGE』の説明に来られました。国際保健医療協力に関われるサークルがあると知り、ぜひ参加したいと思いました。

森山：　ほかにも『BRIDGE』主催の説明会を開催しています。毎回30～40名の参加者がいるんですよ。中にはすでに青年海外協力隊での活動経験がある人もいたりします。NCGMに入る人たちには、国際協力に興味のある人が多いという印象です。

◆：国際医療協力局を持つNCGMだからこそ活動しやすい環境だと思いますか。

森山：それは思います。『BRIDGE』の活動をする上でも、国際医療協力局の専門家の方に相談に乗っていただくことも多いですし、ICU（集中治療室）勤務時代の先輩が国際医療協力局に異動されたので、目標とする姿が身近にあるのは大きいと思っています。

藤岡：うまくスケジュールが調整できれば、国際医療協力局の国際保健基礎講座などの研修に参加することもできますし。

森山：NCGMにいることは国際協力の情報を得たりと、活動するのにとても大きなメリットだと思います。自分自身がアンテナを張った状態でいれば、視野も広げていけると思っています。そして看護師として経験を積みながら、色々な研修にも参加できる恵まれた環境だと思っています。

興味のある人は多いと思うから
だからもっと多くの人と一緒に活動できたら　ー藤岡さん

◆：逆に、国際保健に興味を持って活動する上で、今足りないものって何ですか。

青木：僕個人の問題ですが、時間ですね。行きたい研修やセミナーなどがある時に、なかなか仕事の合間に時間を見つけるのが難しくて機会を逃してしまうのが残念ですね。

藤岡：私は、興味のある人は多いと思うので、もっと多くの人と一緒に活動できたらいいなと思います。『BRIDGE』も本気で国際保健をやりたい人しか入れないと思われているのかも知れないですが、本当はそんなことはないので気軽に参加できることを知ってもらいたいですね。

◆：ものすごい熱い人たちのサークルかと思ってためらう人もいるかもしれないですよね。（笑）

青木：そうなんです。（笑）でも本当はまったく自由な雰囲気で、自分たちのやりたいことをやれるし、職場の部門を隔てて知り合いが増えていく楽しさがあります。

森山：定例会は国際保健医療協力の情報交換の場というだけでなく、趣味や勉強の身近な仲間を見つける機会にもなっています。時には飲みにも行って、職場の悩みを相談したりもできる交流の場でもあります。なので、もっと気軽に集まってもらいたいです。（笑）

『BRIDGE』には仲間がいる

色んな意見が聞けるから励みになります　ー青木さん

◆：『BRIDGE』のようにともに活動する仲間がいるって大きいですよね。

青木：そうですね。1人で問題意識を持って考えても正しいかどうか分からなくなりますが、志を共有できる仲間がいるとお互いに意見を言いながら考えがまとまってくるし、励みにもなります。僕にとっては『BRIDGE』はそういう場ですね。

藤岡：私はまだ看護師としての方向性が固まらない中で、先輩の話が聞けたり、留学を目指して具体的に行動している同期の話が聞けたりすることが参考になるし刺激にもなっています。

森山：実際に『BRIDGE』にいた先輩方が国際医療協力局に入って活躍されているのを見ると、やっぱり自分もそうなりたいなと思うし、頑張って続けて行こうという気持ちになります。そういう気持ちを持ち続けられる場でありたいですね。

◆：まだ若い皆さんが多忙な毎日の中で世界に目を向けて頑張っているお話を伺うと元気が出ますね。最後に今年の活動予定を聞かせてください。

森山：5月にセミナーの開催を予定しています。それからスタディ・ツアーも企画中です。国際医療協力局から派遣されている専門家の方や、NGOなどと連携して充実した内容にしていきたいと思っています。

◆：いつか日本の国際保健医療協力の前線で活躍される日がくると信じています。どうもありがとうございました。

国際保健医療協力サークル
『BRIDGE』

SINCE 2005

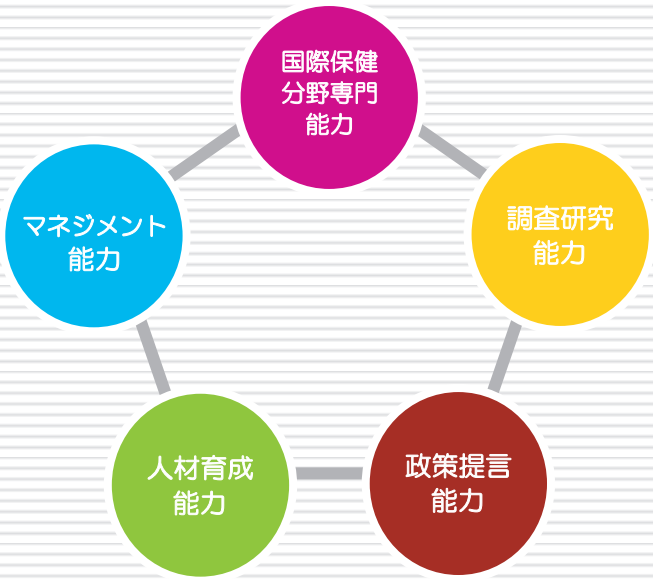
ご興味がありましたらご参加ください！

代表：森山 潤

jun_endeavour@hotmail.com

国際保健医療協力の専門家になったら

NCGM国際医療協力局の専門家のスキルとキャリアパス



国際保健分野専門能力

国際保健分野として、公衆衛生、母子保健、感染症、保健システム、疫学・統計、政策、医療経済、保健人材育成などの専門知識を持つ

マネジメント能力

海外事業案件の形成と仕組みを理解し、プロジェクト・マネジメントなどの知識を持って国内外で業務を遂行する

人材育成能力

国内外の保健医療人材養成研修を企画・運営する

政策提言能力

国際保健の政策を理解し、海外の政府機関や国際機関で政策を提言する

調査研究能力

研究計画を作成し、調査・分析手法に基づいて調査研究を行い、成果をまとめて発表する

グローバル保健医療人材としての仕事をスタートさせると、そこから業務経験と並行して、人材育成プログラムや自己啓発による能力開発を積み重ねていきます。自立して活動ができるようになるためには、保健医療の専門知識以外にも必要なスキルがあるからです。

NCGM国際医療協力局では、国際保健医療協力の専門家としてプロフェッショナルな仕事をする上で必要なスキルを左の図にある5つに分類し、個人の特性に合わせた人材育成プログラムが組まれています。新規採用された人材は、最初の5年間にこれらのスキルをバランス良く高めて実務レベルを向上させることが期待されています。

若手の専門家は、すでにプロフェッショナルとして活動中のシニア専門家の指導を受けながら、実際の活動に参加し、必要な業務に取り組んでいきます。仕事の全体像や流れを体験しながら、担当業務の幅を徐々に広げていくことで、5年後には多くのことに自立して取り組めるようにレベルアップしていきます。右の表のように、各スキルには1年目、3年目、5年目の段階に分けて目標とするレベルがあります。

そして将来的には、実務経験を積んだ上で、各国の保健省のアドバイザーをはじめ、国連機関のチーフや国際保健に関する教育関係者、日本を代表する提言者などへとキャリアパスが広がることが想定されています。

国際保健医療協力の専門家に求められるスキルとレベル

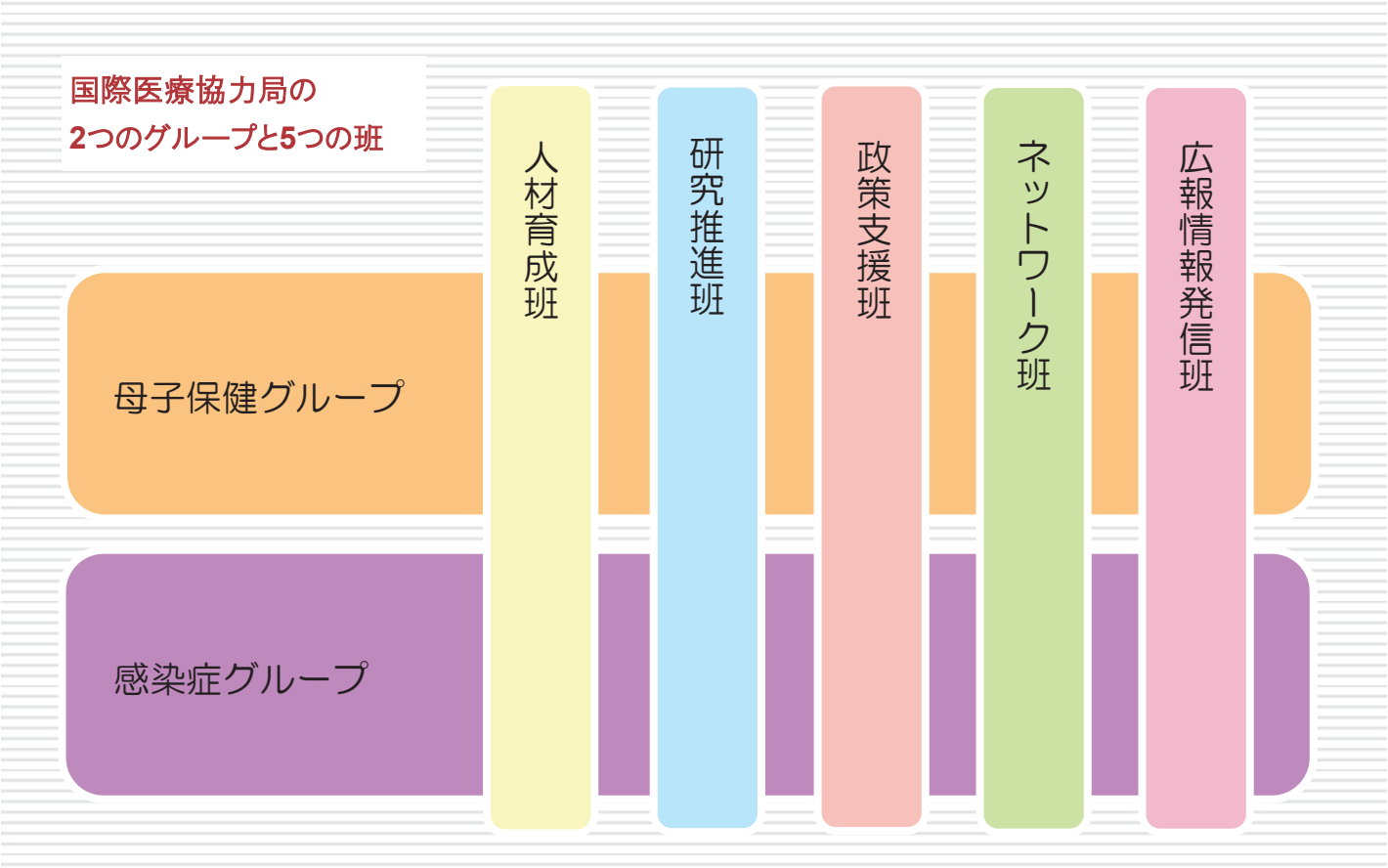
	1年目	3年目	5年目
国際保健分野専門能力	・国際保健の専門分野の概略を理解する ・国際保健事業の評価の概要を理解する ・シニア専門家の指導のもとでプロジェクトの後方支援に参加する	・国際保健の専門分野から自分の専門領域を持つ ・シニア専門家の指導のもとで国際保健事業の評価をし、成果を提示する ・シニア専門家の指導のもとで関係者との協働により国際保健事業の後方支援をする	・専門分野の国際学会で発表する ・国際保健事業の評価をし、成果を提示する ・国際保健事業の後方支援をする
マネジメント能力	・海外事業案件の形成と仕組みを理解する ・シニア専門家の指導のもとで議事録や報告書を作成する ・TOEICスコア640程度の英語力を習得する	・シニア専門家の指導のもとで支援先の国とプロジェクト全体の把握と現状分析をする ・短期・長期派遣専門家として活動計画を立案し、技術協力支援活動を行う ・シニア専門家の指導のもとで会議や各種業務チームを企画・運営する ・国内外で英語を使用して業務を遂行する	・プロジェクト・マネジメントについて理解し、短期・長期派遣専門家として自立的に業務を遂行する ・会議や各種業務チームを企画・運営する ・国内外で英語を使用して業務を遂行する
人材育成能力	・カウンターパート（相手国の受入れ担当者）のための研修の概要を理解し、コース担当者としての役割を果たす ・人材養成の集団研修の概要を理解し、コース担当者としての役割を果たす ・研修サイクル・マネジメントを理解する	・シニア専門家の指導のもとで国際保健に関する研修を企画・運営・評価する ・自身の国際保健の経験を専門分野と関連づけて紹介する ・シニア専門家の指導のもとで国際保健に関する講義をする	・国際保健に関する研修を企画・運営・評価する ・研修の運営全般について後進の指導をする ・国際保健に関する講義をする
政策提言能力	・国際保健の政策の変遷や世界の潮流を理解する ・各種プロジェクトについて支援先の国の保健政策と国別援助計画との関連性を理解する ・日本の国際保健に関する政策の変遷と現状を理解する	・専門分野の保健課題について、国際会議の動向や他の援助機関の活動を理解する ・国際機関の正式文書の内容を理解する ・専門分野の各種調査団の会議や課題別の委員会にオブザーバーとして参加する	・課題別の政策提言案をまとめる ・支援先の国でのプロジェクトに関連した保健政策を提言する ・国際会議に補佐やオブザーバーとして参加し、成果を報告する
調査研究能力	・文献のレビューを行う ・基礎的な調査手法（質的・量的）を理解する ・基礎的な分析手法（統計など）を理解する	・シニア専門家の指導のもとで研究計画書を作成する ・シニア専門家の指導のもとで研究結果を国内外の学会で発表する ・シニア専門家の指導のもとで研究結果を論文にまとめて投稿する	・研究協力者として量的・質的調査研究を実施する ・研究結果を国内外の学会で発表する ・研究結果を論文にまとめて投稿する

NCGM国際医療協力局作成：2011年度版人材育成関連資料より

国際医療協力局は、国際保健の専門分野の中でも母子保健と感染症の2つの分野の課題に特に重点的に取り組んでおり、これらを2つの活動グループに分けています。

また、専門分野やグループに関わらず局内を横断的に専門家を振り分けて構成する5つの班もあります。5つの班は、発展が求められる組織的な機能を強化するための業務に取り組んでいます。現在は、人材育成班、研究推進班、政策支援班、ネットワーク班、広報情報発信班があります。

それぞれの専門家は、いずれかのグループと班の両方に属して、並行して担当業務を進めていきます。新しく入った専門家も同様に国際保健医療協力の実務



国際保健医療協力の専門家になったら

NCGM国際医療協力局の専門家のスキルとキャリアパス

と、組織強化の役割を習得していくことになっています。

国際保健医療協力の専門家として必要な各スキルは、右の表のような機会を通じてレベルを上げていきます。業務を遂行する上で共通して重要になる素養が、国内外のさまざまな関係者と話し合い、協力しながら成果を出せるコミュニケーション力や調整力です。相手のニーズや考え方を、その人が背景に持つ文化や習慣まで理解した上で尊重し、解決策をともに考え抜く柔軟な姿勢が常に必要になります。

国際医療協力局の専門家のキャリアパスを紹介しましたが、これがすべてではありません。グローバル保健医療人材としてどのような道を進むのかは、1人ひとりが何を専門に持ち、どういう成果を上げたかによって色々な方向に進む可能性が広がっていくからです。常に自分なりのビジョンを持ち、国際保健の情報にアンテナを張りながら自己啓発を忘れないことが、自身の可能性を広げることにつながるでしょう。

国際保健医療協力の専門家に求められるスキルを向上する機会

	スキルアップの機会
国際保健分野専門能力	・国際保健に関する国際学会に出席する ・国際保健医療協力研修に参加する ・外部（JICAや大学など）の研修に参加する
マネジメント能力	・プロジェクトにオブザーバーとして参加する ・インターンとしてプロジェクトを経験する ・報告会などで英語でプレゼンテーションする ・討議などでファシリテーションを行う ・プロジェクトに必要な情報提供をする ・プロジェクトメンバーとして、評価調査団などの受入れをする
人材育成能力	・研修を企画し、運営する ・研修サイクル・マネジメントや、研修技術に関する研修を受講する ・海外で開催する研修をフォローアップする
政策提言能力	・シニア専門家が開催する、専門分野における国内外の潮流に関する勉強会に参加する ・日本の国際保健医療協力の援助政策に関する会議にオブザーバーとして参加する ・国際会議に補佐、またはオブザーバーとして参加する
調査研究能力	・研究協力者として調査の実施・分析・考察するとともに、報告書を作成する ・統計ソフトや質的調査研究などの研修を受講する ・研究結果を国内外の学会で発表する ・論文の投稿を支援する

グローバル保健医療人材になった私

小児科臨床医から国際保健医療協力専門家へ

グローバル保健医療人材として働く人たちは、誰もが最初から国際協力の専門家を目指していたわけではありません。国際保健や開発途上国とは関わりがないまま、国内の医療現場で多忙な日々を送り、医師や看護師としての経験を積んでいたという人も数多くいます。NCGM国際医療協力局の木多村氏もその1人です。何をきっかけに国際保健に興味を持ち、国際保健医療協力の世界に飛び込んだのでしょうか。

木多村 知美

きたむら・ともみ

小児科医。NCGM国際医療協力局の専門家。母子保健分野の国際保健医療協力を担当する。現在は、マダガスカルのプロジェクトの成果評価を研究している。

2000年から8年間の国内5カ所の病院で小児科医としての臨床経験を積む。2008年にイギリスのリバプール熱帯医学校に留学。熱帯小児学修士課程を修了。2009年にネパールの医療ボランティアに参加。2010年より現職。

広報情報発信班（◆）：木多村先生は常に海外に出られているイメージが強いので、今日のインタビューは貴重な機会ですね。先生は子どもの頃から今のように医師になって海外で仕事をしたいと思われていたんですか。

木多村：いえ、小児科医になって8年間は国内の病院で働いていましたから、最初から海外で活動しようという考えが大きかったわけではないです。でも、海外には幼少の頃から興味はあって、中学生くらいの頃にアフリカの飢えている子どもたちの写真を見ると自分に何かできないかな…と思ったりしていました。母が話してくれたシュバイツァーにも漠然とした憧れもあって。

◆：先に医師を目指そうという気持ちがあったんですね。

木多村：そうですね。医師になりたいと思ったのは、小学生の頃でした。親族に医療分野の人はいなかったので、両親はすごくビックリしていましたね。私は子どもの頃、咽喉が弱くて、よく扁桃腺を腫らしていて、その頃のかかりつけの小児科医の先生がとても素敵な先生だったんです。で、こんな人になりたい！と思って。（笑）同じ職業になればいいのではと単純に思ってしまい、小学校の卒業文集には「小児科医になりたい」と書きました。（笑）

◆：小学生の頃からの夢をぶれることなく実現させたなんてすごいですね。

木多村：「小児科医になりたい」という思いだけでここまで来てしまった感じです。（笑）それで、国際協力の世界に入るまで、NCGMではない別の病院で普通の臨床医を8年間続けました。

小児科医になる夢をかなえて臨床に8年
違う世界が見たくてイギリス、リバプールへ

◆：そこからどのように国際協力へと転身したんですか。

木多村：臨床医として5年目の時に大学病院の新生児科の病棟の医師として呼び戻されたんですが、臨床医としての自分に限界を感じる部分もあり、“少し違うことをしてみたい”という気持ちがありました。海外に出てみるというのも、“少し違うこと”の1つでした。でも小児科医不足の状況でしたし、国際協力をやりたいと宣言するまでに3年ぐらいかかりました。

◆：なぜそのような気持ちの変化があったんですか。

木多村：私は専門が新生児医療で、まさに最新鋭の高度医療なので、臨床の現場は医療従事者にとってだけでなく、患者さんである赤ちゃんやご家族にとってもすごく大変でした。大学病院では病棟に常駐できるわけではなく、外来や当直があったりと、体力的にもきつかったですね。何より、自分の診ている赤ちゃんに集中できないというのが嫌でした。新生児はやろうと思えば色々な診療が出来るのですが、あまりにも高度化している分野なので自分1人の力ではなかなか思うように行かないわけです。ちゃんと出来ないと患者さんに申し訳ないという気持ちがあって、自分が納得できるぐらいのベストな医療を尽くせないのであれば、やってはいけないんじゃないかと思って、限界を感じていました。それで、一度、臨床をスパッと辞めて違う世界を見ようと考えるようになりました。

◆：いよいよ海外に出られるようになってどんなことをされましたか。

木多村：イギリスのリバプールにある大学院に留学して、熱帯医学の研究科で勉強しました。公衆衛生学と熱帯医学の知識を持って熱帯地域で小児科の臨床をすることを学ぶようなコースです。マラリアやフィラリアなど、日本では見られない熱帯病を勉強することができました。

留学先のリバプール熱帯医学校

留学時代の友人たちと（後列中央が木多村氏）

途上国で暮らせるのかという不安だけど世界のより多くの子どもたちのために何かしたかった

◆：それは国際保健の分野になってきますが、その頃には国際協力へ進もうと思われていたからですか。

木多村：軽く思っていた気もしますが、明確には決めてなかったと思います。日本でもやれることはいっぱいあるだろうと思っていましたから。多分、国際協力に進む方は、学生時代に開発途上国にボランティアに行ったり、スタディツアーに行ったりする人が多いと思うのですが、私はそれまでまったく経験なかったですし。でも、海外で医療をやることに漠然とした憧れもありました。臨床の経験を踏まえて、世界のより多くの子どもたちのために何かしたいと思っていました。

◆：自ら環境を変えることに不安はなかったですか。

木多村：生まれも育ちも東京のいわゆる都会っ子なので、こんな根性なしが厳しい環境でやっていけるのかと思って、実際に開発途上国で暮らせるのかなという不安はありました。（笑）

◆：国際協力活動はどのように始められたんですか。

木多村：大学院を卒業して帰国してからは、以前に勤務していた病院で当直や外来のアルバイトをさせていただいてお金が貯まったら国際協力のボランティアに出かけていました。

シュバイツァーへの憧れから開発途上国での医療に関わりたいと思っていましたが、1人の医者が現地で治療しても、その人が帰国してしまえば終わってしまうことに疑問を感じるようになりました。ボランティアに行くうちに、やっぱり現地の人が技術を身につけられるようにしないといけないんじゃないかって思ったんですね。それで、本格的に国際保健医療協力の仕事を探すようになりました。

国際協力の仕事がしたいけれどその入口が分からない

◆：どんな探し方をされましたか。

木多村：まず選択肢にあったのは、国際機関です。ユニセフやWHOのインターン、あとは国際NGO、世界の医療団、国境なき医師団とかですね。NGOに所属して行く方法や、青年海外協力隊なども考えましたが、受け入れてもらえるタイミングが合いませんでした。イギリスのNGOも希望したのですが、フィールド経験がないということで落ちました。そこで、それならフィールドに行ってしまおう！と。（笑）

グローバル保健医療人材になった私

医療ボランティアをした
ネパールの村にて

病院で小児科医として働いていた頃

◆：ボランティア経験を実績にしていったということですね。

木多村：そうです。留学時代に修士論文を書く時にデータ収集をしたフィールドがネパールだったので、また行ってみようという感じでネパールの医療ボランティアに登録しました。村の診療所で医者として働いたり、現地にスイスのNGOが作った小児整形外科の病院があったのでそこで勤めたりしました。私と同じような立場で、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどから来ている人たちもいましたよ。

◆：ボランティアで行くのと、国際機関に就職して行くのとではどんな違いがありますか。

木多村：ボランティアだと、活動が短期なので収入が安定しないことは不安材料でした。また活動内容も限定されますね。NGOから長いプロジェクトで行ける場合は収入も保障されるし、活動もじっくりできるとは思いますが、プロジェクト単位なので帰国したらまた自分で生活を考えなくてはいけないという不安定さがあります。

◆：仕事を探す時に苦労した点はありますか。

木多村：私は学生時代や臨床医の間にまったく国際協力関連のネットワークを張っていなかったので、始めたい時に入口が分からず、どうしたらいいか迷った分、大変だった方じゃないかと思います。

NCGMとの出会い
新生児科医にもできる
国際協力があるんだ

◆：NCGM国際医療協力局とはどんな出会いでしたか。

木多村：最初は、臨床5年目で参加した学会主催のセミナーで、当時NCGMに勤めてらした山田多佳子先生と出会ったのが始まりですね。その時のグループワークのテーマが「新生児科医にもできる国際協力」で、新生児科医にも国際協力で出来ることがあるんだ！と思いました。

◆：留学する前ですね。

木多村：そうです。その時は特に動かなかったんですが、臨床医を続けて8年目に、勤務先の教授に「海外で仕事がしたい」と伝えた時に、国際保健に携わる先生をご紹介いただき、その方に「NCGM国際医療協力局がいいですよ」と勧められました。

プロジェクトを評価する研究の仕事に新たな興味が生まれた それはやってみないと分からなかったこと

◆：2度目の接点ですね。

木多村：それで、あれよあれよという間にNCGMに出向き、「職員を募集していますよ」と言われて。（笑）でもその時は国際保健の知識もなかったので勉強したい気持ちが強くてそのまま留学してしまいました。卒業して職探しをしていた時に、JICAのキャリアセミナーで相談に乗ってもらったら、「NCGMが職員を募集していますよ」って言われて。

マダガスカルにて（左：木多村氏）

国際協力の道に進んでも 小児科と臨床にこだわっていきたい

◆：なんだか運命を感じますね。（笑）

木多村：はい。（笑）留学を機に国際協力の道に進みましたが、私は小児科の分野にも関わっていたいというこだわりがありますし、やはり臨床も好きです。NCGMはセンター病院があるので、今でも当直だけは続けさせていただいて、少しでも臨床とつながりを持つようにしています。

◆満を持してNCGM国際医療協力局に入って、どのような仕事をされましたか。

木多村：小児科に関連して何かないかなって思っていた時に、マダガスカルでの研究の仕事があると聞き、それに飛びつきました。「マラリアと急性呼吸器疾患と下痢の治療をする地域の保健員さんを育てたプロジェクトがあり、その評価・研究をする」というもので、私のやりたい分野の“小児・地域・臨床に近いこと”が揃っていると思ったんです。以来、マダガスカルによく行かせてもらっています。

◆：実際に活動してみてどうでしたか。

木多村：私は臨床医だったので、いわゆるマネジメントや行政の仕事の経験がなく、国際医療協力局の業務はかなり新鮮でした。入った時は、プロジェクトに参加したくて、どんなことするのかなと興味がありました。マネジメントもやってみたかった。でも、プロジェクトの成果をどう評価するかとか、より良くするにはどうしたらいいかということを研究する方に関心が移って行きました。やってみないと分からないものですね。もともと研究は好きではなくて自分でも向いていないと思っていたので不思議です。（笑）

◆：先生にとって国際保健医療協力の仕事の魅力は、どんなところですか？

木多村：臨床では、1人の命に深く関わるので、患者さんに思い入れが強くあります。この仕事は公衆衛生なので、もっと多くの人に良いことをもたらすかもしれないという点でやりがいがあります。1人の赤ちゃんに関わる世界も、世界の赤ちゃんに関わる世界も、どちらも捨てがたいんですけどね。今でも当直も続けていることで、私なりにバランスを取りながらやっています。今後も子どもに関わる仕事を続けて行きたいと強く思います。

臨床経験があるから現場で共感できる
国際協力で活きるのは
医療のスキルだけじゃない

◆：最後に、かつての木多村先生のように国際保健医療協力に興味はあるけど無理かなと迷っているような若い人たちにメッセージをお願いします。

木多村：私は行き当たりばったりの方で、この先もどこに行くか分からないので参考にならないかも知れませんが…、私から強いて言えることがあるとすれば、国際保健医療協力の世界に入る前に8年と長く関わった臨床は無駄ではなかったということです。小児科で必死にやってきたので、良いところも辛いところもよく分かっているつもりですが、開発途上国で現地の病院の先生や保健師の方と話をすると、国が違っても臨床で歯がゆく思うところは変わらないと感じます。臨床の経験があってこそ共感できるということは、国際協力をする上でとても役立っていると思います。

その一方で、医師としてのスキルだけでは不十分な世界なので、幅広く勉強しておけば良かったと思います。国内外を旅して、色んな人と出会ったり、目に触れたりするだけでも受ける刺激が違うと思います。私自身は行かずに後悔したくないと思って飛び込みましたが、国際協力をしに海外に行くか行かないかは、それぞれが視野を広げる中で判断していけばいいと思います。自分が後悔しないようにやればいいのではないかと思います。

仕事を探している時は、どこにもチャンスがないように感じたこともありましたが、今は時間はかかってもどこかに繋がっている道はあるんだと思っています。それを信じて、与えられた場所で経験を積みながら自分を活かせる道を見つけていただければと思います。

◆：どうもありがとうございました。

木多村先生も読みました
国際保健医療協力を知るための
おススメ BOOKS

国際協力師になるために
山本敏晴（著）白水社

国際保健医療協力をするために必要なスキルや知識、キャリアプランなどが分かりやすく書かれた一冊。

国際保健医療のお仕事
中村安秀（著）南山堂

国際保健医療への関心を仕事に結び付けるためにはどうしたらいいのかをナビゲートする一冊。

国際協力の現場から
山本一巳/山形辰史（編集）岩波書店

国際協力に携わる18人の若手専門家が最前線の現場を語る入門書。

これからのグローバル保健医療人材へ

国際保健は目の前にある

国際保健の現場で起こっていることは、決して“どこか遠くの知らない人”に起こっていることではありません。かつての主な課題は、多産多死や熱帯感染症など、日本国内ではすでに解決済みのものでしたが、昨今では、生活習慣病や院内感染、多剤耐性菌、医療費の高額化などが優先度の高い課題として新たに加わってきています。これらの課題は、日本においても対応が急がれる重大な問題であり、実際に国内の臨床や研究の現場では、多くの保健医療従事者が解決に向けて取り組んでいます。それはつまり、日本国内の保健医療現場で、1人ひとりの保健医療人材が日々の仕事を通じて気付くことや考えること、感じることの延長線上に国際保健の現場があるということでしょう。そのように考えると、保健医療人材が国内・国外のどちらで仕事をするかに関わらず、“グローバル・ヘルス”がいかに身近なものであるかが分かってきます。

現在、保健医療の課題をグローバルな視点で見ると、過去のものと現在のものという枠組みで分けることができなくなっています。健康格差のない世界を目指して国際社会が協力し合って取り組むことは、持続可能な社会をどう構想するかという世界共通の課題でもあります。それは今のグローバル保健医療人材がまさに取り組んでいることであり、これからのグローバル保健医療人材に期待されることでもあるでしょう。

世界への扉は1つじゃない

保健医療人材がグローバルに活動しようと考える時、狭き門であると感じる人は少なくありません。国際協力の仕事を始めることには、学校を卒業して就職試験を受けて入社する、というような定型的な“就職活動”や“入社時期”がないからかも知れません。最初の一歩を踏み出すには、誰もが自分自身の意志を持って入口とタイミングと活動内容を選ぶ必要に迫られます。しかし、その入口の選択肢は意外と多く、だからこそどのような形で国際協力に関わり、将来的にどのような

役割を目指すのかという道は、実は活動する人の数だけ何通りにも広がっています。NCGM国際医療協力局の専門家も、それぞれにきっかけがあり、辿ってきた道があって現在の仕事に就いています。そして人によっては現在の活動は1つの通過点かも知れず、まだまだこの先にもそれぞれに道の選択肢があります。

世界に目を向け、国際保健に関心を持ち続ける中で学び体験し開けていく道もあるでしょう。理想の先輩像にも出会うかも知れません。ある専門家は、国際協力の世界に型にはまった入口もキャリアパスもないからこそ、携わる人たち同士がグローバル保健医療人材としてどう進むべきかをともに考え、見出すことができると言います。また、別の専門家は、夢とビジョンを持ち続けて自分自身が直面する現場の1つひとつに真っ直ぐに向き合うことが、道を切り拓いていく過程で一番の大きな支えとなると言います。国内の医療現場で働く間に得られた知識や経験や考え方が、グローバル保健医療人材となった際にも自分自身のベースとなって活きてくるのでしょう。

最初の1歩を踏み出すために

国際医療協力局では、医学部や看護大学などへ専門家を講師として派遣し、国際保健を学ぶ講義を提供しています。授業終了後には学生たちからさまざまな声が寄せられます。ほんの一部ですが、国際保健の扉を少し開いてみた人たちの言葉として紹介します。

- 他国の歴史や社会的背景を理解した上で看護をするために必要なマクロの視点は、日本でも必要なことだと感じました。
- 国家・地域間の健康格差の現実を知り、私も何かをしたいと思いました。
- 日本の保健医療の方法を教えるのではなく、その国に合わせた方法をその国の人と考えることが大切だと分かりました。
- 世界中で医療の格差が減り、安全で安楽なより良い医療を目指したいと思いました。
- 日本の保健医療には、役割として、日本だけではなく、世界の人々の健康と生活の質の向上に貢献することが求められていると学びました。

世界を知ることで日本を知り、日本を知っているからこそ世界に提供できるものを知ることができます。国際保健に触れるほんの小さな1歩からグローバル保健医療人材への道は、広がっていくのかも知れません。国際医療協力局は「生きる力をともに創る」をモットーに、次世代を担うグローバル保健医療人材を応援し、その道をともに創りたいと考えています。

■国内の「国際保健学」大学講座

北海道大学　大学院医学部保健学科　社会医学専攻予防医学講座 国際保健医学分野 http://www.hs.hokudai.ac.jp/
東北大学 大学院医学系研究科　国際保健学分野 http://tuih.jp/
東京大学 大学院医学系研究科　国際保健学専攻 http://www.sih.m.u-tokyo.ac.jp/
東京医科歯科大学　大学院医歯学総合研究科 環境社会医歯学系国際健康開発学講座健康推進医学分野・国際保健医療協力学分野 http://www.tmd.ac.jp/grad/ith/index.html
新潟大学　医学部国際保健学教室 http://www.med.niigata-u.ac.jp/pub/welcome.htm
名古屋大学 医学部　大学院医学系研究科　国際保健医療学・公衆衛生学 http://www.med.nagoya-u.ac.jp/
京都大学　健康政策・国際保健学　国際保健学講座 http://www.med.kyoto-u.ac.jp/J/index.html
神戸大学　大学院保健学研究科　国際保健学 http://www.ams.kobe-u.ac.jp/

■国内の熱帯医学やその他国際保健関連の大学講座

長崎大学熱帯医学研修所　熱帯医学修士課程・国際健康開発研究科 http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/nekken/

■海外の代表的な大学院

（アメリカ）ほかにも多くの大学でMPHが取得可能

Harvard University School of Public Health http://www.hsph.harvard.edu/
Johns Hopkins School of Public Health http://www.jhsph.edu/
Tulane University School of Public Health and Tropical Medicine http://www.sph.tulane.edu/
Columbia University http://www.mailman.columbia.edu/

（アジア）

Mahidol University（タイ） http://www.tm.mahidol.ac.th/eng/index-eng.php

（ヨーロッパ）

London School（イギリス） http://www.lshtm.ac.uk/
Liverpool School of Tropical　Medicine（イギリス） http://www.lstmliverpool.ac.uk/
Institute of Tropical Medicine（ベルギー） http://www.itg.be/itg/

■国際保健、公衆衛生、政策立案関係の研修など

FASID 公衆衛生、開発学などの修士課程、研修コース http://www.fasid.or.jp/
国立感染症研究所　FFTP－J 1年間の感染症専門家の養成コース http://idsc.nih.go.jp/fetpj/index.html
国立国際医療研究センター　国際医療協力研修 座学の講義とフィールド実習を4週間で行う国際保健医療協力の研修コース http://www.ncgm.go.jp/
長崎大学熱帯医学研修課程 3ヵ月間の基礎医学中心の講義と実習の熱帯医学全般のコース http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/nekken/
JICA-国際協力基礎 能力開発研修：保健システム・母子保健 http://www.jica.go.jp/

海外からの便り

派遣先の国から届く専門家たちの便りを紹介します

From Laos

名前の自動変換 !?

ラオスには私たち日本人が思わずクスッと笑ってしまうような忘れがたい人名があります。例えば、留学から帰国し保健省に復帰したスタッフの「テッパンヤさん」。初めて聞いた時、「鉄板屋さん」と頭の中で自動変換されました。それから、時々目にする名前の1つに「ピシットさん」があります。保健省スタッフとお話してきた短期専門家から「今日のピシットさんはぴしっとしておられました」という報告もありました。他国にもこういう忘れがたい名前が結構あるのではないでしょうか。

ラオスから　NCGM 国際医療協力局　岩本 あづさ

From DR Congo

あります、忘れがたい名前

コンゴには「キヨコさん」がいます。プロジェクトが始まる前の詳細設計調査の時に、関係者リストに「Kiyoko」という名前を見つけ、「おっ、日系コンゴ人かも知れない。」と思いました。会場を見回しましたがそれらしき女性は存在せず、発見したキヨコさんは優しく微笑むシックな中年男性でした。ほかにも「カトウさん」もいます。

コンゴ民主共和国から　NCGM 国際医療協力局　清水 孝行

From Zambia

厳しい花嫁修業

ザンビアでは、結婚前に2週間ほど花嫁・花婿修業が行われます。おばさんを始めとする村の女性たちが花嫁に料理や夫への仕え方などを事細かく指導して、最後には難しい踊りなど色々な無理難題を課して鍛えます。一方、花婿の方はおじさんや村の長老が担当し、これまた妻の扱い方から家庭内のもめごとの解決方法まで、色々と教え込むそうです。無事に2週間の“研修”が過ぎると晴れて結婚式を迎えます。今はだいぶ簡略式になっているらしいですが、「いつも夫をたてるように」「何があっても実家には戻ってこないこと」など、ザンビアで花嫁になるのは結構大変そうです。

ザンビアから　NCGM 国際医療協力局　石川 尚子

セミナー情報

専門家から国際保健医療協力を学べる2つの講座

★ 2012年度　国際保健基礎講座

参加申込受付中 !!

開催期間：5月-3月　全10回
月1回（第4土曜日）
どの回からでも、1回のみでもご参加いただけます
参加費：無料

★ 2012年度　国際保健医療協力研修

6月より募集開始 !!

期間：　9月24日～10月19日
場所：【コア研修】NCGM研修センター
【フィールド研修】
ベトナム社会主義共和国（予定）
参加費：フィールド研修の実費のみ
（約20万円／個人負担）

8～11ページでも紹介しています。

詳細・お申込みは…
NCGM国際医療協力局ホームページまで
http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/

次号はsummer & autumn合併号（10月発行予定）です。
お楽しみに！
↓↓バックナンバーは国際医療協力局ホームページで↓↓
http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/

掲載記事の情報提供者：

開こう！グローバル保健医療人材への扉：国際医療協力局　国際派遣センター長仲佐保／【インタビュー】グローバル保健医療人材を目指す人たち：BRIDGEメンバー　森山潤、青木浩司、藤岡亜未、広報情報発信班　下部純子（インタビュアー）／【インタビュー】グローバル保健医療人材になった私：国際医療協力局木多村知美、広報情報発信班　下部純子（インタビュアー）／これからのグローバル保健医療人材へ：国際医療協力局　堀越洋一／海外からの便り：国際医療協力局岩本あづさ、清水孝行、石川尚子／編集後記：国際医療協力局　田村豊光

NEWSLETTER spring 2012

2012年4月30日発行

独立行政法人 国立国際医療研究センター 国際医療協力局
National Center for Global Health and Medicine
Bureau of International Medical Cooperation, Japan
〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
tel: (03)3202-7181（代）　fax: (03)3205-7860
http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/

編集後記

今回の「NEWSLETTER」春号は、主な読者層として国際保健医療協力を目指す学生の方々や保健医療従事者を想定しています。一般的な職業ガイドブックには見当たらない「より親しみやすい身近な国際保健医療協力のはなし」を紹介してまいりましたがいかがでしたでしょうか。

何事にも、誰にでも、第1歩を踏み出す時期があるはずです。グローバル保健医療人材を目指して少しづつともに前進してみませんか。本書がそのきっかけになりましたら幸いです。皆様のこころの扉が開き、世界へと邁進されることを期待して止みません。

NCGM 国際医療協力局
広報情報発信班